

有斐閣選書

近代日本文学における中国像

村松定孝
紅野敏郎
吉田熙生
編

日本文学における中国像

紅野敏郎・吉田漉生編



有斐閣
選書

近代日本文学における中国像

<有斐閣選書>

昭和 50 年 10 月 20 日 初版第 1 刷印刷

昭和 50 年 10 月 30 日 初版第 1 刷発行



編 者	むら	まつ	まだ	たか
	村	松	定	孝
	こう	の	とし	ろう
発 行 者	紅	野	敏	郎
	よし	だ	ひろ	お
	吉	田	瀬	生
発 行 所	え	ぐさ	ただ	あつ
	江	草	忠	允
	株式	有	斐	閣
	会社			

東京都千代田区神田神保町 2~17

電 話 東 京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 株式会社精興社・製本 和田製本

© 1975, 村松定孝・紅野敏郎・吉田熾生.

Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります

はし が き

本書は近代日本の文学者たちが表現した、中国についてのイメージの抄録と解説であり、同時にそのイメージという視点から近代日本文学史に一つの照明を試みたものである。編者の意図は、近代日本の文学者たちの、中国についての認識の実状を明らかにするとともに、中国を一つの鏡として近代日本文学の特性の一端を明らかにすることにあつた。個人にとって一人の他者を語ることが結局自己を表現することであるように、中国についてのイメージは結局日本をも表現するものだからである。

明治以来、日本文学が西欧文学の影響を強く受けて来たことはよく知られている。西欧は何よりもまず日本文学が「近代」を獲得するために学ばねばならぬ先達として現われた。しかし、鷗外、漱石、荷風、光太郎、その他少数の人々を除いては、戦後のある時期まで、文学者たちは身をもって西欧を経験することなく西欧を学んでいた。西欧は遠くて近い国だったのである。

これと全く対照的に、文学者たちにとって中国は近くて遠い国であつた。たとえば鷗外や漱石の教養の根幹に存した漢文学は、すでに日本化したそれであつて、現実の中国とは殆ど無縁であつた。時代が下り、「近代化」が進むにつれて、中国はエキゾチズムの対象となるか、戦争という外発的な契機によって接触を余儀なくさせられるかのいずれかであつた。竹内好、武田泰淳といった文学者の方がむしろ例外的な存在なのである。

もちろん、動機が何であつたにせよ、すぐれた文学者は見るべきものは見ている。その個人としての洞察力は信頼するに足りるであろう。しかし近代日本文学史全体として見た場合、中国との関係は明らかに負の次元に属している。これは「近代化」の裏側にあってこれを支えた日本のナショナリズムの問題であり、日本の文化伝統、さらには日本人の感受性の「型」の問題でもある。

鏡は多ければ多いほどよいが、負の次元に属するもの、裏側にあるものを想像し明確にして行くことは難しい。もし、『近代中国文学における日本像』という書物が現われるなら、本書と合わせ鏡になつて問題は一層明確になると思われるが、これは編者の力にあまることである。現在の段階では、個々の文学者の中国像の集成から想像していただくほかはない。

収録作品は大体一八九〇年代からはじめ、一九五〇年代でとどめ、制作年次、題材、ジャンルを考慮して配列した。割愛せざるを得なかった作品も多い。

終りに、快く協力して下さった執筆者各位、中国関係事項について校閲して下さった藤井昇三氏に厚く御礼申し上げる。また編集、進行に際していろいろ御面倒をおかけした有斐閣の深沢敏樹氏にも御礼と御詫びを申し上げねばならない。

一九七五年九月

村松定孝
紅野敏郎
吉田熙生

執筆者紹介 (五十音順)

大久保典夫	(おおくぼ つねお)	東京学芸大学
小笠原克	(おがさわら まさる)	藤女子大学
尾崎秀樹	(おざき ほつき)	評論家
神谷忠孝	(かみや ただたか)	中央大学
紅野敏郎	(こうの としろう)	早稲田大学
佐藤勝	(さとう まさる)	国文学者
高橋春雄	(たかはし はるお)	相模女子大学
田中艸太郎	(たなか そうたろう)	佐賀県教育庁
都築久義	(つづき ひさよし)	金城学院大学
平岡敏夫	(ひらおか としお)	横浜国立大学
村松定孝	(むらまつ さだたか)	上智大学
安田武	(やすだ たけし)	評論家
山田博光	(やまだ ひろみつ)	帝塚山学院大学
吉田熙生	(よしだ ひろお)	東京女子大学

はしがき

明治・大正文学における中国像

概説

1 中江兆民 △三酔人経綸問答▽

儒教的・漢学的兆民 『三酔人経綸問答』の構成 『三酔人経綸問答』における兆民の位置 兆民の中国観

9

2 岡倉天心 △支那遊記▽

発見された『支那遊記』の稿本 『支那遊記』の由来 天心の足跡 江辺人と河辺人 中国とヨーロッパとの関係 日本美術と中国との関係 『東洋の理想』と『支那遊記』

15

3 国木田独歩 △愛弟通信▽

従軍記者独歩 日清戦争をめぐる 「義戦」をはみ出すもの 死せる

21

4	田岡嶺雲 △戦袍余塵▽ 清兵への凝視 勝者と敗者——独歩の中国・中国人像	27
5	田山花袋 △第二軍従征日記と一兵卒▽ 『戦袍余塵』の成立 北清事変の概略 嶺雲の従軍 清国処分 嶺雲の非戦論 中国民衆の一面 嶺雲と中国	33
6	森 鷗外 △うた日記▽ 田山花袋と日露戦争従軍 花袋における中国民衆の存在感 リアリズムがとらえる民衆の顔 詩情化の盲点	39
7	桜井忠温 △肉 弾▽ 東洋・西洋を包括する野心的国詩 戦は戦、民は民の態度 「唇の血」・「扣鈕」 「石田治作」に寄りそう心	48
8	幸徳秋水 △病間放語▽ 『肉弾』と著者 遼東半島をめぐる人民像と日露戦争目的 人か獣か——中国民衆像 中国	54
9	夏目漱石 △満韓ところ／＼▽ 無政府主義へ 「余が思想の変化」 革命は進歩なり 無政府主義と老荘成立と背景 孤独な意識の働き 人間にとって「他者」とは何か	60
10	真下飛泉 △戦友ほか▽ 戦前日本人における満州イメージ 真下飛泉——その人生観・国家観 純	66

昭和(戦前・戦中)文学における中国像

概説

14 横光利一 △上海▽

横光利一と中国 横光利一と芥川竜之介 作品の成立 主題 参木の主張 中国人観 クライマックス

105 98

15 黒島伝治 △武装せる市街▽

111

11 武者小路実篤 △八百人の死刑をめぐって▽

新聞に掲載されぬ一文 台湾統治の実体への憤激 コスモポリタンの立場からの反戦ドラマ 『周作人先生のこと』をめぐって

74

12 佐藤春夫 △南方紀行▽

成立と背景 「探偵小説に出るやうな人物」 政治と風光と旅愁と

82

13 芥川竜之介 △支那游記と湖南の扇▽

薄い現代中国への関心 中国風物を見る文人の眼 『湖南の扇』——その成立と背景 政治に対する根源的無関心

88

作品の背景 日本商社の横暴ぶり 山崎と中津 反戦兵士への弾圧
出兵の結果 反戦小説 中国観

16 里村欣三 △苦力頭の表情▽ 前田河広一郎 △支那▽ 117

あらずじ 謎につつまれた経歴 中国に求めたもの 作品の意図 李

刀達の描き方 呉老人の教え 前田河広一郎の意図

17 平林たい子 △敷設列車▽ 伊藤永之介 △万宝山▽ 123

日本の「満州」進出 「敷設列車」と苦力の反逆 プロレタリア文学の視

座とリアリズムの手法 満州流浪の朝鮮農民 伊藤永之介と農民文学

18 久保栄 △中国湖南省▽ 129

プロレタリア演劇と中国 久保栄小伝——『中国湖南省』まで 『中国湖

南省』の初演 作者の意図 あらずじ 意義 中野重治の『中国湖南

省』観

19 林房雄 △上海戦線と青年の国▽ 135

上海戦線への従軍 敵国人に身を売る女 林房雄の戦争観 『青年の国』

の成立 『青年の国』の概要 王劍秋の日本批判 木村明男の中国観

20 阿部知二 △北京▽ 141

憂鬱な青春の幻想 昭和一〇年の『支那遊記』 阿部知二小伝——『北京』

まで 二人の日中知識人 登場人物の明暗 知識人の憂愁 苦渋に満

ちた知的対話

27	26	25	24	23	22	21
小林秀雄 △蘇州▽	金子光晴 △没法子——天津にて▽	保田与重郎 △蒙疆▽	上田 広 △黄塵▽	尾崎士郎 △悲風千里▽	火野葦平 △麦と兵隊▽	石川達三 △生きてゐる兵隊▽
詩人の曇らない眼	中国文化への深い畏敬と愛情 『絶望の精神史』の中の中国民衆 孤独な	佐藤春夫とともに 日本浪漫派の系譜 『蒙疆』の内容と反響 『蒙疆』 に見たもの 橋川文三の「日本ロマン派と戦争」 竹内実の見解 「私の 大東亜戦争は終っていない」	「戦場」としての「戦場」 上田広にとっての「民族」	『中央公論』特派員 戦勝の跡を巡る 従軍記集『悲風千里』 予想外 の従軍記 恩讐を越えた人間愛 四回、中国へ渡る	中国との出会い 「麦と兵隊」を支えているもの 「麦と兵隊」の限界 兵士の心情の記録として 「赤い国の旅人」と中国	『蒼氓』から『生きてゐる兵隊』まで 『生きてゐる兵隊』の本質 その内 容と構想
183	177	171	165	159	153	147

小林秀雄のみた戦争・戦場 か	中国文化への違和感 真の相互理解とはなに	28
和田 伝 △大日向村▽	茂来山麓の寒村 農業恐慌の襲来 満州移民——大陸侵出と農村厚生運動 の接点 分村方式の先鞭 政治性と非政治性	189
島木健作 △満洲紀行▽	「開拓団」内部の生活リポート 農業技術・経営に関する問題提起の書 「自然の豊かさ」の前の「人間の素直さ」	195
小田嶽夫 △城 外▽ 八木義徳 △劉広福▽	外務書記生小田武夫 「城外」の史的位相 八木義徳と満州 野性味の なかの純粹なる人間像	201
武田泰淳 △司馬遷▽	その文学のなかの中国 その体験のなかの中国 『司馬遷』まで 『司馬 遷』と『史記の世界』の間	207
竹内 好 △魯 迅▽	近代中国文学と魯迅 竹内好における魯迅への傾倒 竹内好を通過した魯 迅精神の外延 国民文学論と魯迅・その他	213

戦後の文学における中国像

38	37	36	35	34	33	概説
安部公房	五味川純平	堀田善衛	富士正晴	伊藤桂一	田村泰次郎	
△けものたちは故郷をめざす▽	△人間の条件▽	△歴史 史▽	△一夜の宿ほか▽	△東洋への郷愁と黄土美論▽	△残酷な顔の女▽	
..... 257	 251	 245	 239	 233	 227	 220
条件 日本人の盲点を衝く 『人間の条件』の意味	『人間の条件』の背景 特殊工人としての中国民衆像 最低限度の人間の	堀田善衛の『敗戦』体験 複眼的な国際的視座 『祖国喪失』 『歴史』	中国大陸の富士正晴 「一夜の宿」 「崔長英」	黄土の中に過ごした青春 兵士の戦場小説 戦場での生活を描く 牧歌	「肉体の悪魔」 『蝗』	

内容と構成 日本人にとっての「満州国」 荒野をさまよう二匹のけもの
否定される本能的帰郷衝動

39 木山捷平 △長春五馬路▽ 263

満州農地開発公社囑託・木山捷平 敗戦後の満州都市における日本人 作
品を貫く庶民の視点 強調される人間精神の尊厳

40 本多秋五 △重慶の印象▽ 269

第二回訪中代表団 『共同声明』 周揚の印象 上海から重慶へ 囁み
合った中国との幽車 「重慶の印象」

41 草野心平 △点・線・天▽ 275

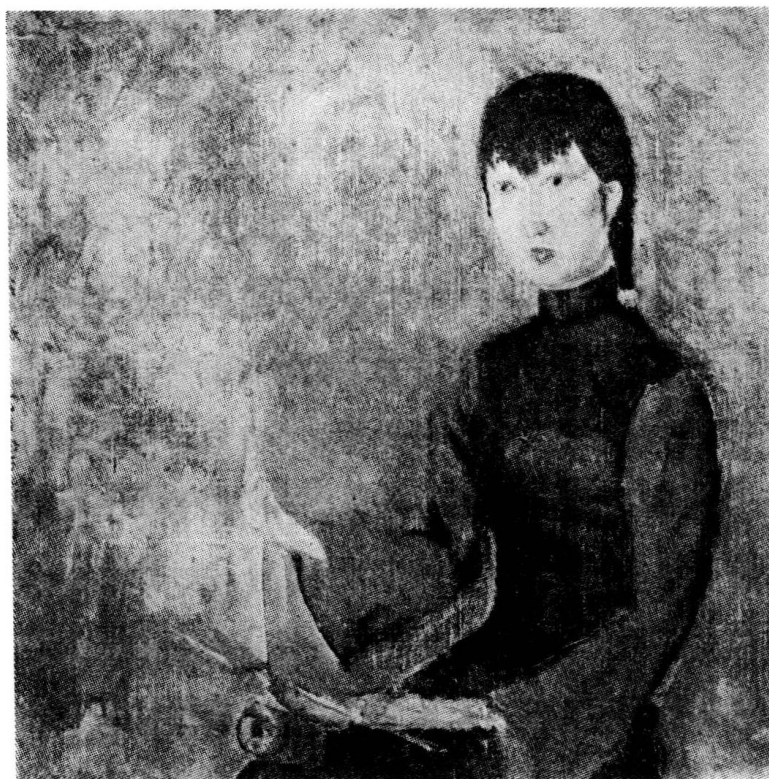
中国に寄せる草野の愛 草野の別離と挫折感 中国人の「おとなぶり」
詩的幻想と戦争責任

42 中野重治 △中国の旅▽ 282

初の外国旅行 文学者の眼 『六億の蟻』批判 働く姿 食堂の婦人
「北京大学の午後」 魯迅について

〔写真提供〕 日本近代文学館 共同通信社

明治・大正文学における中国像



「中国の少女」(三岸好太郎画, 北海道立美術館蔵)

明治・大正文学における中国像概説



痛みとためらい

私たちが「近代日本文学史」を講義するような場合、「近代日本文学における中国像」というような個別テーマを従来どのようにキチンと組み入れて処理してきたであろうか。

中国像、と限定しなくても、あるいは「近代日本文学における朝鮮人像」でもよいし、「近代日本文学とアジア」というふうにおきかえてもよい。ともかく近代文学の展開のなかで、つねに近代日本をとりまくまわりの諸国・諸国民との、考えようによれば、まことに深く、かつ痛い関連を、私たちの作家はどう眺め、どのように認識し、どう表現してきたか、また、それらについて私たちは、どういうあとづけをしてきたであろうか、という問いをみずからの胸につきつけてみると、思わず顔があらんでくる。

近代文学の起点について、その確立期について、その展開と変質については、私たちは先学の業績から多く学んでもきたし、その学んだことを土台にして、多くの修正意見も提出してきた。個々の作家論、作品研究の輪は、最近に至って一段と広まり、かつ深められた。また「大逆事件と文学」というようなテーマに象徴されるような、国内の重要問題については、研究もそれなりに集中し、語られる機会も多かった。しかし「近代日本文学における中国像」ということになる、個々の作家、作品に即してはかなりに強く言及されても、おお根のところ、その全体の姿と実相を、歴史の流れに沿って、こまやかに検討する、という作業はほとんど行なわれてこなかったと思う。和光大学の祖父江昭二らがそのゼミにおいて真正面からその課題にとり組んでいるということが近頃の新鮮な心うたれるニュースとして伝えられたこと自体、従来この種のテーマが敬遠されたり、放擲されたりしてきたことのまぎれもない証拠でもあった。

いわゆる大東亜戦争の最末期の昭和一九年に見習士官の一人として南方スマトラのバレンバン郊外の守備部隊にいた経験を持つ私自身、いまこのテーマに真正面から立ち向かうことは、まことに重苦しく、また一面恥かしくさえ感ずる。明治や大正期の文学者の中国認識、アジア認識の甘さやマイナス面を、またときとして発揮せられた鋭い洞察力をうしろから指摘してみせるだけではことばすまなくなってくる。昭和の十五年戦争そのままの歴史の中で育った私自身、見えるべきものがまったく見えてこなかった、素朴な皇国の青年だったが故に、またその後も具体的に文学史の課題の一つとしてこの問題とまともに取り組んでこなかったが故に、恥かしさは倍加する。

それらからくるためらいの気持をひきつづき内に強く持ちつつも、近代文学史研究の一つの有力な足